

南禅寺の美しさ

山根佑基

(2018年度入学 鈴木ゼミ2期生)

京都には数多くの寺社仏閣が存在する。そのどれもが歴史的、文化的な価値を備えている。今回はその中でも特に私が美しいと感じた南禅寺を取り上げ、その特徴や歴史的価値に触れてみようと思う。

2020年7月20日、私は南禅寺を初めて訪れた。今年は新型コロナウイルス感染症によって、年初めより思うように外に出ることができなかった。大学の講義もオンラインだったため、「美しい景観に癒されたい」という思いが日増しに強くなっていった。感染者数が収まりつつあった時期を選び、マスク等対策を万全にした上で南禅寺へ向かった。目的地を南禅寺にしたのは「行ったことがなかったから」というごく単純な理由である。しかし、そこで感じたものは私の予想を大きく上回った。美しい木々の中に荘厳とそびえる建築物の数々。一際目を引くれんが造りの水道橋。その全てに重厚な歴史の厚みを感じ、それらの面前に今自分がいるということに感動を覚えた。



南禅寺は京都市左京区にある臨済宗南禅寺派大本山の寺院である。臨済宗は禅宗の一つで、座禅を組むという身体的体験によって悟りを開くことを目的とする宗教である。日本では鎌倉~室町時代にかけて、幕府と強い繋がりを持っていた。南禅寺は1291年、時の亀山法皇が無関普門禅師を開山に迎えて開創された。亀山法皇は後嵯峨上皇の皇子として誕生し、上皇になってからは蒙古襲来という国難に立ち向かった人物である。国難が去った後、離宮禅林寺殿で出家し法皇となられた。この頃、禅林寺殿に夜な夜な妖怪が現れていた。このことが法皇を悩ませていたが、無関普門が静かに座禅をただけで妖怪が退散したため、亀山法皇は無関普門を開山に講じた。開山後しばらくして無関普門は死去するが、二世住職の規庵祖円指揮の下、南禅寺伽藍の建設が行われた。寺号がそれまでの「禅林寺殿」から今と同じ「太平興国南禅寺」とされたのもこの頃である。1334年に後醍醐天皇によって五山の第一とされた。ここでいう五山とは臨済宗における寺格の一つであり、「五山」は最も上位を表すものだった。1385年、足利義満によって「別格」として五山のさらに上の位置づけとされている。古くより日本の禅寺の中で最も高い格式を持つのがこの南禅寺ということである。

そんな由緒正しい南禅寺には国の重要文化財に指定されている三門が存在する。三門と聞くと門が三つある画を想像してしまいが実際はそうではない。仏道の修行で悟りの境地に達するために通過しなければならない三つの関門を指す三解脱門を略したものが三門



で、様式にかかわらず寺社の正門のことをそう呼ぶ場合が多い。圧倒的な大きさもさる事ながら、細部にまで意匠を凝らしてあるため、しばしば京都三大門や日本三大門の一つとして語られることもある。開創当初のものは1295年に西園寺実兼の寄進によって創立され、ついで応安年間に改築されたが1447年、火災によって焼失してしまう。現在の三門は1628年に藤堂高虎が大坂夏の陣に倒れた家来の菩提を弔うために再建したものである。柱間が5間で入り口が3間を指す五間三戸の二重門は南禅寺の格式の高さを表す象徴的なものである。また、南禅寺の三門を語る上で外せないのが歌舞伎「楼門五三桐」だろう。この二幕目返して、天下の大泥棒として有名な石川五右衛門が三門の楼上で「絶景かな、絶景かな」というセリフを言う。このことから、南禅寺が歴史の中で大きな存在感を放っていたことがわかる。

南禅寺の境内には水路閣という、観光客に人気のスポットが存在する。これは、1885年から着工された琵琶湖疏水の一部である。琵琶湖疏水が造られた目的は大阪湾と琵琶湖間の通船や水車動力による紡績業、灌漑用水、防火用水などであった。しかし、水力発電の有利性が注目されるようになり、1889年に蹴上に発電所が建設され、91年には送電を開始した。また水力発電の増強と水道用水確保のため、1908年に第2疎水の工事が、始まり、1912年に完成している。同時期に蹴上浄水場が建設され、現在は上水道の水源として利用されている。

赤れんがで作られた水道橋は異国の建築物のようで、寺の境内に存在するのは不自然なように思える。建設当初は反対の声も上がったそう。実際に訪れてみると南禅寺の境内で一番目を引く建物であることは疑いようがなかったが、周りの景観との違和感こそまで感じなかった。むしろこの土地に積み上げられてきた歴史の流れを肌で感じられた気がした。



今回、南禅寺が持つ歴史的価値やその特徴について詳しく触れたことによって実際の訪れた時に感じた感動に「理由づけ」を行うことができたように感じた。境内から感じた静けさは臨済宗が目的とする悟りのための身体経験に必要なものだったのだろう。三門から感じた逞しさは、開創当初の政権の強大さや培われてきた歴史の重みがあるからこそ感じたものだったのかもしれない。新型コロナウイルス感染症がもう少し落ち着いたら、今回得ることができた知識とそれによって得られた新しい視点で再度南禅寺を訪れたい。

引用文献

臨済宗大本山南禅寺ホームページ

<http://www.nanzen.net/index.html>